

# 京鹿子

令和三年七月一日発行  
通巻二六三号(毎月一回一日発行)

7月号

鈴鹿 呂仁  
拾掬集 その七十



山 番 の 躑 む 三 和 土 余 花 の 雨  
夕 笛 や 嵯 峨 の 小 径 の 余 花 明 かり  
鯔 背 ぶ る 高 下 駄 の 音 初 鯉  
初 鯉 競 り 値 の 指 の 荒 々 し  
初 夏 の か ん ざ し の 街 抹 茶 ラ テ  
蚊 遣 火 の 蕩 け だ し た る 夜 の 底

日 盛 り に 過<sup>き</sup>の 去<sup>ふ</sup> を 拾 ぶ 現<sup>う</sup>し<sup>し</sup>お<sup>み</sup>人  
風 鈴 や 舌 出 す 猫 の 深 眠 り  
火 取 虫 防 犯 カ メ ラ 動 き だ す

吟行岡崎界限

菖 蒲 群 る 京 紫 の 気 色 ば む  
神 苑 の 蓮 の 浮 葉 の 詔 は ず  
恥 ぢ ら ひ を 隠 す 四 葩 や 昨 夜 の 雨  
万 緑 を 一 景 に し て 信 号 機  
街 騒 を 緑 の 包 む 日 曜 日

近詠

和田 照海

青葉木菟

休漁の波止の網山春の蠅  
吉兆の名の舟舫ふ波止遅日  
ダリの時計に合はせ損ねて春惜しむ  
寝かせれば瞑る人形青葉木菟  
はんざきの生の証の泡ひとつ



近詠

松本 鷹根

南風吹く

著 莪の花 大本山へ男坂  
柿の花散り初む門に旧知の僧  
入梅に暈す遠嶺や比良比叡  
狭庭にも風の契りの花あやめ  
南風吹く故郷の浜に龍馬像





## 薔薇の冷

薔薇満つる惑星に今生きてゐる  
頬杖の癖はいつから薔薇かをる  
薔薇真紅モンマルトルに逢ひにゆく  
捨てられぬ合鍵吊るす薔薇の冷  
君に捧ぐ真白き薔薇に口づけす

## 英華採集

蜚鳥賊波打ち際の鬨ぎ合ひ

戸田 梅原 ひろし

本来、蜚鳥賊は深海の底にすんでいるが早春から晩春にかけて産卵のため海岸近くにやってくる。産卵は新月の夜に行われ終われば元の海底へと帰る。しかし、月のない夜では蜚鳥賊は方向を見失い多くが浜辺へと打ち上げられてしまう。俗に言うところの蜚鳥賊の身投げである。蜚鳥賊の意思とは違うもので身投げは気の毒な話と言える。富山湾でよく見かけられる現象を掲句はよく捉えられている。

たんぼぼや縄一本で足る遊び

川崎 羽山 喜舟

昭和・平成と時代は移り子供の遊びも大分様変わりしてきたのではないだろうか？我々の少年の頃の遊びは寒さ暑さも関係なく殆ど外での遊びが大半であって、今の子は家の中の遊びが多いような気がする。そして、もう一つの大きな違いは昔の遊びにはお金は余り掛かっていなかった事が言える。掲句の作者もそのような思いを抱かれています。縄一本で一日中遊べる昔は幸せだったのか？

マネキンと同じ春着る試着室

亀岡 塚本 郁子

閉鎖的な冬が終わり開放的な春ともなれば、女性であれば外へ出かけてみたいと思うのではないか。街へ足を伸ばすとショーウインドーの中は華やかな色の服を着たマネキンが手招きしているように目と目を合わせているような気になる。ルックショップに終わらず誘惑に負けて中へと進み、店員の人にマネキンが着ている服を試着したいと告げる。中七の「同じ春着る」に作者の気持ちが表れている。

水中花 沼田巴字

釣堀に日がな一日遊ぶ鷺  
開けつ放しの農家の戸口燕の子  
大夕焼山の一片欠け始む  
臨終のつぶやき幾つ水中花  
死に際のおどけしぐさや水中花

初 虹 丸井巴水

春炬燵夢みる菓砕き飲む  
あやす児のあり初虹を窓に嵌め  
地獄絵を飾り一樹の桜説く  
芳香のぼどよき湿り桜餅  
春二番雲の切れ目を縫ひし峰

八十八夜 植村蘇星

幾年の八十八夜迎へ吉  
浄土風親子川の字鯉のぼり  
浮き世風寄り添ひ泳ぐ鯉のぼり  
過疎すすむ昭和は遠し柿の花  
過齡てふ草書くらしの竹の秋

梅雨月夜 北川孝子

首ゆるくまはしてもみて更衣  
母の日のふたつとどきし予約席  
夕空の雨美しきよもぎ餅  
積みし書の上に又積み梅雨月夜  
さりげなき別れがわかれ夏落葉

白 鳥 直江裕子

いっぽんの椿あづかるなりゆきや  
迷ひから溶けて流れる春の音  
夫連れて行きて帰りし白鳥か  
春の泥悪なんですの佇まひ  
不可思議なざわめき馬酔木の咲き満つは

花のさざめき 伊藤希眸

浮雲は東の間の郷路の藁  
青鷹春ぼこり泛く窓ガラス  
島べりを幾たび梳る青葉潮  
稜線をはしる流星さくらの夜  
夜目になほ花のさざめき星流る

地のあかり 高木晶子

天の椿落ちて改め地のあかり  
梅の花平を通す石畳  
ライラック視線はかぎりなく上へ  
青柳の昏れ千年の世に戻る  
筥の掘りたて無上四畳半

マリオネット 奥田筆子

高階のアンテナ茸菜種梅雨  
すぐ根付く挿し木茶髪の転校生  
紫木蓮扉開けし罪の軽からず  
反発を誘つてしまひぬ夏みかん  
かぎろひてマリオネットのふたりです

# 神麓集

揚花火

井上菜摘子

噴水の天辺コロラチュラソプラノ  
たましひにルビ打たば鈴蘭のすず  
白さるすべり加速をつけて家古ぶ  
夏の月どこかで傷口がひらく  
ふりむかぬ後頭ばかり揚花火

合せ鏡

村田あを衣

画きて消すスケッチブック海市立つ  
海市かな沖にもありぬ吾が故郷  
後れ翔つかもめは海市見失ふ  
蜃気楼合せ鏡を遠見せむ  
蜃気楼溶け込んでゆく遠汽笛





# 京鹿子集

## 豊田都峰選

京田 山中志津子

朝ひばり胎内時計の振子を巻く  
春雷の一撃山上陵揺らぐ

城陽 鷺山 珀眉

たんぽぽを休止符として余生の歩

飛鳥なる巨石あそびの春の月

春日傘晩年の帆は全開に

待ち切れず春を迎へに七〇〇系

京都 井尻 妙子

かたちなきものにさ揺ぐ花の頃

花の雨いのちの森に授乳室

自己主張過ぎてむらさきチューリップ

手捻りの杯高だかと花洛の忌

春雨や花街の角やはらかい  
薄ら日のまだ濡れてゐる鳥の恋  
秘すれば花なりあなたとの待ち合はせ  
この先のやや不透明さくら冷え  
乳牛のモンロー歩き若草野

福山 亀井 福恵

遠まなざし母郷はいつも花菜風  
句を拾ふ歩巾となりし一人静

猫柳日差しを弾く鱈あまた

生き過ぎかや生き足りぬさくららの夜

鳥の影しばしとどめて陽の障子

うしろ影追ひかけてゐる春の月

花散るや人に死に頃など無し

由良川を挟んで花の城二つ

赤すぎる君が眩しいチューリップ

風あれば風のリズムに乗るさくら

花万朶わたし密かに紅をさす

落椿はやく掃かねば燃えるかも

木の芽風透明になる呼吸法

春キャベツ比叡の水を巻き上げて

主旋律上げて菜の花明りかな

はつ桜ひかりの中を少女現る

フェルメールのブルーに合はず春帽子

白梅のかをりの魔法二楽章

みよし野の故事の重さや花の渦

皿洗ふ指の先より春の精

妹とお揃ひの靴春休み

春雨や後れまじとて歩を合はず

春休み新教科書の一ページ

花大根有田赤絵の日々の碗

玻璃越しの無言の会話わすれなくさ

福知山 西村 白籽

京都 菊池 和子

高槻 安田 優歌

大阪 本郷 公子

バスを待つ刻埋め尽くす落花かな

肌ざはり良き木洩れ日や山女釣

青き闇抱く竹林朧月

雨音に色を濃くして七変化

植田はや郷の夕風捉へをり

福山 石原 孝人



蜚鳥賊波打ち際の鬨ぎ合ひ

蘭けて春夫安らぎのふた三言

青墨を購ふ小町通り桜花散る

藤の香や耀いてくる初恋

たんぽぽや縄一本で足る遊び

啓蟄やキックバイクに乗る真顔

啓蟄や初めて使ふ絵の具箱

春の雨ミルクに浸すビスケット

マネキンと同じ春着る試着室

春泥の匂ひまとひて夫の靴

春の雨木々にささやくやうにかな

落椿ケンケンパーに老い知らず

戸田 梅原ひろし

川崎 羽山 喜舟

亀岡 塚本 郁子